

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第910号 平成27年4月7日

「八紘一宇」の違和感

「八紘一宇」という言葉が、戦後70年という節目の年に、突然不死鳥のように蘇った事に驚きを禁じ得ません。

しかも、この言葉が戦後20年経って生まれた、戦争を知らない世代である参議院議員三原じゅん子氏の口から発せられた事に、二重の驚きを感じています。

報道によれば、三原参議院議員は3月16日に行われた参議院予算委員会の席上、国際的な租税回避問題についての質問の中で「八紘一宇」は「世界が一家族のように睦みあう事」だとし、グローバル経済の中で日本がどう振る舞うべきかは「八紘一宇」という根本原理の中にある、と発言したとの事です（3月19日付朝日新聞他から）。

大方の読者は「八紘一宇」と聞いてもピンと来ないだろうと思いますので、まず、この「八紘一宇」とは一体どういう事なのかを考えてみたいと思います。

「八紘一宇」という言葉の由来は、日本書紀の中にあります。

『日本書紀』の巻第三では、神武天皇が大和橿原を都と定めた事が記されており、その中で、神武天皇は「掩八紘而為宇、不亦可乎」（あめしたをおいていえとなさんこと、また、よからずや）と語ったとされています。

つまり、「世界（八紘）を一つの家（宇）とする事は、良い事である」という意味になります。この文言を縮約し「八紘一宇」と造語したのは、国家主義的な思想の持ち主である田中智学という人で、1913年（大正2年）に初めてこの言葉を使ったといわれています。

世界の人々が、一つの家族のように仲良く、助け合って行けるなら、本当に素晴らしい事であり、その事に異を唱える人はいないだろうと思います。

「八紘一宇」という言葉を造語した田中智学氏の思いも、そうしたところにあっただのかも知れませんが、しかしその後、「八紘一宇」という言葉は「日本が盟主となってアジアを支配する」という意味で使われるようになり、国威発揚のスローガンの一つとされて行きます。

こうした経緯を踏まえ、昭和58年（1983年）1月の参議院本会議において、当時総理大臣であった中曽根康弘氏は、次のように発言しています。

それは、森田重郎参議院議員（新政クラブ）の「かつて日本の帝国主義の台頭が、

多くの国民の方々の犠牲の中で敗戦という厳粛な事実、そしてあの忌まわしい終戦の様相であります。また、全体主義体制の中で滅亡の道歩んだドイツや、全土を覆ったファシズムがイタリアを、そしてまたイタリア国民を敗戦へと導いた悲惨な歴史の教訓を、この際総理、篤と想起していただきたい（国会議事録から）」との指摘に答えたものです。

一番大事なことは、世界から孤立しないということである。（中略）

日露戦争が終わってから37年目の太平洋戦争の勃発というのは、一言で言えば、日本の無定見な軍事的膨張が日本を世界の孤立に追いやったその結果ではないであろうか。

（中略）

世界から孤立するということぐらい日本に危険なことはない。これは日本国民のあるいは政治家の意識の中で自分の国ばかり考えている、そういう独善性というものが背景にないだろうか。世界情勢を深刻に見つめて、心を広く豊かに持って、世界の水準、世界の歩みのセンターがどこを歩んでいるかということを見きわめるということが必要ではないだろうか。（中略）

要するに孤立化を防ぐ、（それが）一番大事な仕事である。世界の常識の線を日本も歩んでいく必要がある。

戦争前は八紘一宇ということで、日本は日本独自の地位を占めようという独善性を持った、日本だけが例外の国になり得ると思った、それが失敗のもとであった。戦後再びそういう危険性を冒していないだろうか、そういうことを申し上げた。

議事録ですから、読み難いところがあったと思いますが、大変重要な内容ですので、長々と引用致しました。

様々な国の人々が一つの家族のように仲良く暮らすというように捉えれば「八紘一宇」という言葉は美しく響きます。しかし現実には、この「八紘一宇」という言葉は、日中戦争から太平洋戦争にかけて、日本の膨張政策（海外進出）を正当化するためのスローガンとして使用された事は明らかです。

中曽根総理大臣が、独善性といったのはその事であり、その独善性の故に日本は孤立し、やがて、破滅へと向かっていたのではないのでしょうか。

三原参議院議員は『人類は皆兄弟としてお互いに手を携えて行こう』という和の精神を伝えたかった」と述べているようですが（3月19日付朝日新聞から）、「八紘一宇」という言葉が持つ歴史的背景を考えれば、日本が再び対外戦略として「八紘一宇」を持ち出すという事が如何に時代錯誤かは分かるはずです。にもかかわらず三原参議院議員が「八紘一宇」という言葉を持ち出した事は、彼女には、グローバルな国際社会の中で日本が如何に進むべきかといった視点が欠けているように思えてなりません。

今後日本が、地域間の紛争を回避して、新しいアジアの秩序を作るためにイニシ

アティブを發揮しようとするなら、「八紘一宇」といういささか手垢の付いた言葉ではなく、中国や韓国の人々のみならず、アジアの人々が共感し得る、遠大で、崇高なビジョンを示して行く事が必要だと、私は考えます。

(塾頭：吉田 洋一)